

08 さっぽろ垂氷まつり

Sapporo Icicle Festival



内容: 北国の暮らしにとって身近な存在である「つらら」を切り口に、アート、サイエンス、人の営みやその記憶といった多様な視点から、札幌の冬を再発見する新しいお祭りとして、2016年から毎年開催。「さっぽろ雪まつり」とほぼ時期を合わせ、大通公園の西端の札幌市資料館の館内や前庭、裏庭などが会場となっている。「垂氷(たるひ)」とは、「つらら」の古語名。

これまで展示やワークショップ、トーク、ハッカソン、アクセサリ販売などさまざまなイベントが催されてきた。なかでも、360度に伸びるつらら「回転式巨大つらら造形装置」や、コンピュータ制御し人工的に作りあげるつらら「人工氷柱製造装置」は、2016年から毎年バージョンアップを繰り返し、この事業の象徴的なものとなっている。また、2017年には「つららと建築」「札幌の冬の暮らし」に焦点をあてたプログラムが展開され、2018年からは「環境」というテーマに着目して行われている。

目的: この事業の主体となっている「SIAFラボ」とは、市民一人ひとりにとっての「札幌」を考え、発見、発信するプロジェクトの総称であり、札幌国際芸術祭(SIAF)を開催しない期間も多様な活動(交流・連携・研究・開発)を恒常的に続けている。そのプロジェクトのひとつとして「つらら」をテーマとした「Bent Icicle Project - Tulala」(愛称:ツララボ)を2015年度から開始し、さまざまな活動を継続的に行っており、その成果発表の場として始められたのが「さっぽろ垂氷まつり」である。「ツララボ」では、アーティストや研究者がプロジェクトの中心メンバーとなり、「つらら」を題材・媒介としたアイデアを持ち寄り、ワークショップやイベントを通して雪国ならではの暮らしの可能性を検証・再考している。同時に、参加者が、メディア・アートや現代アートについて学びながら、アートプロジェクトの運営に関わることで、そこから新たな芸術文化活動の担い手や、札幌独自の活動の創出を目指している。現在は不定期でのイベント・勉強会・課外活動を軸に活動している。

会場：札幌市資料館

SIAFラボ プロジェクトディレクター：
小野谷圭、石田勝也、船戸大輔

さっぽろ垂氷まつり

2016年 2月2日~2月14日
テーマ：つらら

主催：創造都市さっぽろ-国際芸術祭実行委員会
助成：文化庁/平成27年度 文化庁 文化芸術による地域活性化-国際発信推進事業



つららの氷としての特徴、またそのでき方などに注目し、つららそのものをどう人工的に作るか挑戦した。そこでの知見を活かし、「人工つらら製造装置」「自動回転つらら装置」の開発をはじめた。

さっぽろ垂氷まつり2017

2017年 2月6日~2月12日
テーマ：つららと建築

主催：札幌国際芸術祭実行委員会(SIAFラボ)
助成：文化庁/平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化-国際発信推進事業



2年目は、つららができる建物の構造に注目。前年の作品をブラッシュアップしつつ、なぜ近年の建築ではつららができにくいのか、またできやすい建物とはどのようなものなのかを考え、制作用の実験小屋を設置した。

さっぽろ垂氷まつり2018

2018年 2月3日~2月12日
テーマ：都市・水

主催：札幌国際芸術祭実行委員会(SIAFラボ)
助成：文化庁/平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化-国際発信推進事業

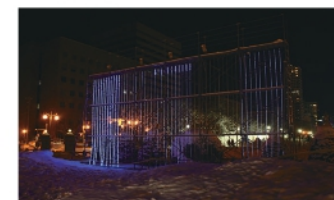


自然環境の変化が叫ばれる昨今の状況を踏まえ、都市と環境の関係を考える機会として、環境の光壁という新しい取り組みを開始した。

さっぽろ垂氷まつり2019

2019年 2月1日~2月11日
テーマ：つららが触れる環境

主催：札幌国際芸術祭実行委員会(SIAFラボ)
助成：文化庁/平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化-国際発信推進事業



前年度の環境に関してより深くアプローチをしている。資料館周辺の環境情報をリアルタイムに捉え、つららや光といった様々な環境の造形を作る。



「回転式巨大つらら造形装置」2016年撮影
遠心力を利用し、噴霧された水滴が見たこともないの造形を作る。



「人工氷柱製造装置」2018年撮影
水滴の垂れるコアが自動制御で作動することによって、回転式とは違った新しいの造形を作る。



「垂氷小屋」2018年撮影
あえてつららができる建築構造とした小さな小屋に暖房機能を付加し、開催期間中どれだけのができるかの実験をする。



「環境氷柱光壁」2018年撮影
資料館周辺の環境情報(気温、湿度、気圧)を取得し、その情報から作られる様々な光のイメージをLEDの壁によって造形化する。